

中村武羅夫 明治四四年の日記

田澤 基久 (国語教育講座)

日記は、青色野線入り和紙を袋綴じたものに三五丁にわたって墨書(一部ペン書き)されている。記載は明治四四年六月一日に始まり、翌四五年三月二十八日に至るが、最後は日付のみであって、実質的には四四年一月二一日で終わっている。巻頭には次のような序文が置かれている。

其の日くくの行つたことや、心の状態を、偽らず飾らず記して、自己を反省する料ともなし、又、遠く時を隔てた将来、自らの経て来た心の跡をたづねて、其の遷り変りを眺めるよすがともしやう。斯う云ふ心持ちで此の日記を記す。要するに自分と云ふものを正しく観、そして知る為めである。
日記は、自分にとつて、自分を責め鞭つところの鞭であると同時に、又、自分の姿を映して自ら眺めるところの鏡である。

四十四年六月一日

一

六月一日

新生に入るの日。父の家、伯母の家、午后よりたづねたり。双親弟妹に対して尽す可き責任、怠慢なるを責む。尤もなり。どう言はれても、どう思はれても仕方なし。他にせめらるゝに先ちて自ら責め居ることなり。伯母の心、伯母の苦しい立場を思ふと、真に済まぬことに思ふ。父、母、何事も知らぬ弟や妹、皆憐れなり。自己と他、苦しきことなり。仕方なし、出来るだけ一家の為めに力を尽さんと思ふ。夕方、悲しく心の顛えを感ず。シミぐくと人々の意を安んぜしめたし。正しき人、正しき道に生きん為めの今度の革命なり。されど弱きは人の子よ。他の嘲り嗤ふ前に、自ら耻ぢ嘲るの苦を嘗めつゝあるなり。

六月二日

午前閉居。四時ごろ東海林君来訪。一緒に出掛ける。梅雨に近き頃なり。白くこまかなる雨は溢れんばかり緑りに降りそゞぐ。町にも、野にも、山にも。

ネルの着物に、素足の白き、蛇の目の傘に肩より上を隠して赤き帯の見えたる。強く目を引く。柔らかにして、快き心をかすかにそゞるは此の頃の女なり。其の鮮明ならざる色も好し、其の柔軟なる質も好し。
此の日紅緑氏宅に泊す。

六月三日

一日を同家に暮す。天候、晴れるにもあらず、降るにもあらず、苦しき日なり。頭重し。

土屋君来る。柳川氏宅にゐたる人、今迄は何となく虫の好かぬ人なりしも、話して見れば善良なる好もしき人なり。

同家に夕飯を共にし、若竹に義太夫を聞く。芸の老巧なる者は芸其物に即せず、三分の余裕を存して語る。其所に初めて人を離れて芸は独立す。芸其の物を自由に觀賞し得るなり。文芸の境地も其所にあると知る。

又、多くの語物を聞きて、さまざまなる人事の悲劇の奥に時代の大いなる力の潜めることを感ず。

風劇し。川鉄にて一酌を傾け、又々紅緑氏宅へ行き、其所に泊す。

六月四日

暑し。白地を着たる人々をボツく見受く。少しく汗に汚れたる綿入一しほ暑苦し。

夕方、町を歩いて夏の色彩豊かなるを感ず。女の色も水菓子屋の店先に並べられたる果物の色も、其のいづれも豊艶なり。

鶴扇亭に義太夫を聞く。

六月五日

午後紅緑氏宅へ行く。若き人々の新作朗読会があるなり。集る者四五人、別に取止まつた話もなかりき。斯くの如き会合に期待を持つは誤りなり。

同家へ泊る。

六月六日

午前中紅緑氏宅にて無意味に暮す。午后より浅草へ行き活動写真を見る。土屋、東海林の二君と共に。夕方万世庵にて一酌を傾く。深川今源へ行き其所にても飲む。

帰途、二人と別れて余は一人浅草へ行く、十一時宿へ帰る。我が我俚、二君に対して耻づること深し。

革命を企てながら此の始末なり、呪はしき我が身、我が心よ。されど、どうにも仕方なし。明日よりは大いに仕事に着手せんと決心す。

六月七日

午前加藤君来る。午后より新潮社へ行く。其の足直ちに中村星湖氏をたづぬ。

夜、加藤君をさそひて呂清の壺坂を聞く。此の頃女の肌の美しさ、心の動揺烈し。

六月八日

終日を歩き暮す。葉舟、雨雀、未明の諸氏をたづぬ。夜、再び葉舟氏をたづぬ。

不在中東海林君来りたる由。夕方より雨。夜、心甚だ淋し。

六月九日

眠れるうちに斉藤姉より電話あり、醒まさる。昨夜も一度かけし由。訪ねたき故都合聞き合せなり。午后なれば好しと答ふ。

秋江氏を訪ねしも不在。御風氏へ行く途中、逢ひて引き返す。

一時、斉藤姉来る。醜き女、話すこともなきに長座、煩はし、ピツチ、其の面に

睡せんと欲す。心に厭ひ憎みながら、相手がモチ／＼してゐれば又一面気の毒な

心もありて何かと考へ出しては話す。我が心弱し。

漸く三時に帰る。ホツとする。女のツウ／＼しきは厭はしきものなり。

午睡。五時夕飯を終りたる時、伯母より電話あり、午前十一時ごろより八束行方

不明、些つと来れとのことなり。忙しき時面倒なりと思へど詮方なし。別に驚く

心も案ずる心もなし、たゞ煩はしと思ふのみ。

家に行きても不愉快なり。何故に父母兄弟に優しき懐しさを以て対せられざるや、

悲し。我身に近き肉身ほど厭はし。

秋江氏を訪ふ。神楽坂を散歩。すしの立食ひ。

六月十日

重苦しく曇りたる日。入梅の候なり。小石川、本郷などへ行く。どこも心持が不

愉快なり。煩はしくてならず。重い荷を負ひて、引きつらねながら歩みつゝある

なり。

夜、少しく雨降る。加藤君と共に呂清の二十四孝を聞く。

親、家、厭はしく。己れ自身も厭はし。

斉藤姉又々来りし由、咄、醜女！ 度来たら玄関扨ひなり。

六月十一日

午前御風氏を訪ぬ。江戸川より電車にて京橋木挽町まで行く。歌舞伎座前にて電

車を降る。芝居開場中にて、白粉と、紅と、柔らかなる着物に装ひを凝らせる美

しき人々は、細かくしぶく雨を蛇の目の傘に除けつゝ、つどひ集る。彼等は、己

が装ひの美しさを示さんとて 又、舞台に跳る美しき人々を見んとて此の所に

群れ来れるなり。美は、金の専有なり。誇り、楽まんとする彼等の群れの中に、

生活に営々として追はれつゝある、貧しく、儂なき自らの姿を見出したる時、堪

へ難き耻ぢと悲みに心暗かりき。此の目もて彼等の姿を見ること能はず、わづか

にのがれぬ。されど、大きな建物、勢ひ好く走る光る車、行き交ふ人々の柔ら

かなる衣ずれ、我が胸痛し。

ふつくと肌に快き空気が、総てのものゝ色彩、真に都らしき心地す。されど、一

人我れのみは斯る所に足を止む可き資格無きが如く覚ゆ。心細し。

夜、浜田君、加藤君来る。斉藤妹より電話。不在なりと答へしむ。明朝来る旨言

ひし由なれど、留守をせしむと頼む。

絶対に沈黙せんことを願ふ。語らんと欲する時には壁に向ひて語らん。何事をか

人に語る時、即ち人に求めたるなり。自ら卑しくすることなり。

牛込見附まで行く。水分の多き青葉の間に見ゆる火。水にうつりたる火、其の色

柔らかにして快し。

六月十二日

ついでありて実家へ寄りしに転宿中、手伝ひをなす。両親に接しゐること、実に

堪へ難き苦痛なり。四時帰宅。

加藤君来る。沈黙、々々。語らんとする時、壁に向ふことを忘るゝ勿れ。

魯庵氏を訪ふ。青葉に暗き道を一人トボ／＼と歩む、悲みと、寂み、頻りに胸を

圧す。

帰途十時、月光蒼く流れて、物の影鮮かに美し。

六月十三日

午前指ヶ谷町に横山源之助氏を訪ねしも不在なりき。暑し。

午後図書館へ行く。倦怠を覚ゆること甚だし。

夜、草平氏を訪ひしも不在。夕立あり。

六月十八日

私の今迄での態度は、すべて軽卒であつた。私は今迄で何をしたらう。残つたも

のは悔ひより外にない。悔ゆる心 今夜の此の悲しい心を忘れてはならぬ。空

の雲つた風の吹く夜、胸をかゝえて嘆いた此の悲みを。けれども私は時が過ぎると、人の前に出ると、犬のやうに此の心持ちを忘れて了ふ。そして喋る、笑ふ、跳ねる、何と云ふ浅猿しいことだ。人と会ふことも避けよう、人と語ることも避けやう、私は其の時何時でも辱めを覚えるではないか。悔むではないか。何も彼も非だ。改めねばならぬ。此の室に 自分の室に、息を潜めて、静かに、小さく生きねばならぬ。蝸牛のやうに。

六月卅日

連日の雨、心狂ほし。時に陰鬱にして病的なる性慾の発作猛烈なり、恐ろし。氣候と、身軀のせめるべし。

今吾が心水の如く透徹せり、静かに、穩かに、而して冷かなり。空しき気分なり、かすかに悲しきを覚ふ。

獅子の如く猛に、鷲の如く疾く強く、蛇の如く聡明に、栗鼠の如く敏捷に、犬の如く伶俐に、羊の如く温容に あゝ、其のすべてを兼ねそなへたき哉。

雨中新潮社へ至り十円受取り、父の宅へ持参す、しぶく雨に濡れて歩む我が姿の悲しさよ、汝之れにても恋を求むるや 之れにても尚ほ。

無智に生きる者の悲しさと痛ましさを感ず。あゝ、母を、父を、弟を。彼等に対する此の冷徹にして深刻なる批評の眼なからしまかば。

人間は種なり。種以外に何物もなし。宗教の種あり、芸術の種あり、哲学の種あり、道徳の種あり。されど、之れを形とする時、其所に人間あり、厭ふ可き偽りあり。

六月十七日 廿五日。此の間小田原に暮す。

正直なれ、細心なれ、冷酷なれ、真面目なれ。

吾れ余りに人を恐れること深きに過ぎたり、何を恐れ、何をためらふや、自ら為さんと欲するところをなせ。第二者、第三者の心と言葉を思ひはかりて自らを曲ぐるは憎む可く卑む可き怯懦なる哉 夜、散歩、雨止みて空黒し、町の火美し。女の姿美し。

山川来る、彼も生存せり、吾れ、何を思ひわづらうの要ありや。

短き生涯のうちにさまなる生活を味ひたき欲あり、海上生活もして見たし、島の生活もして見たし、海外へも行つて見たし、今一度北海道に帰りてあの生活も味ひたし。

十二時頃風葉氏可也酔ひて来らる。青果氏宅へ同道す。青果氏二階へ在りて毒罵を逞しくす、何の故か知らず、語愈々と劇し。斯くの如き人に対して一種の哀みを覚ふ。对手が如何に冷かなる批評を下すかも知ること得ず、自己の感情に盲し

て他を痛罵して快となし得る人の幸福さよ、又、みじめさよ、痛ましさよ。我が心寸毫も動かざりき、冷々として池の水の如き心もて此の一場の光景を眺むることを得たり。嬉し、さるにても恐ろしき我が心なる哉。

後年、武羅夫はこの頃を回想して次のように書いている。

が、血の氣の多い独身者だつたし、デカダンな風潮が盛んだつた時代で、「耽溺」とか、「沈没」などいふ名称のもとに、僕たちは、よく遊びに行つた。金さへあれば、もちろん出かけて行つたし、金がなくても、無理をして出かけて行つた。そのために、ひどく生活に困らなければならなかつた。下宿代とか、家賃など、満足には払へなかつたし、本とか、着物とか、外套でも、帯でも、時に依ると夜具なども、質屋に運ばなければならぬやうなことも度びくだつた。下宿代が溜つて払へなくて、房州の方に逃げて行つたり、その房州で、又宿屋の払ひが溜つて払へないので、遁走を企てゝも船に乗ると捕まへられるので、陸路を歩いて逃げて帰郷したりしたこともあつた。

（我が文筆生活の記録、わが自然と人生 岡倉書房 昭和10・8・25 所収）
序文と併せ考えれば、いうところのデカダンな生活からの脱却がこの日記をつけ始めた動機であつたと思われる。また、窮迫する一家を長男として支えなければならぬという意識もそれと同時にあつただろう。そうしたジレンマの中で苦闘していたのがこの時代の武羅夫であつた。

明治四四年七月号の『新潮』には五篇の無署名記事がある

忘れられたる不遇の文人 狂死せる中西梅花と原抱一庵

天才の片影 令妹の語れる故樋口一葉

噂の種

都会写生（其一）夜の五分間

六月の重なる創作

これらのうち、訪問記事である一葉妹邦子の訪問記事と、文壇ゴシップである「噂の種」が武羅夫の筆になると思われるが確証はない。

二

七月一日

雨、内臓の腐り行く如き不快なる心地す。思ふに疲れたるなり。穴の如き一室に籠居して一日を暮す、光彩もなし、希望もなし。

七月四日

連日の雨、侘びし。終日閉口。夕方少し晴る。初めて青き空を眺めたる喜びあり。夕月淡し。

神楽坂散歩。女の肌の滑らかに艶々と美しさ、其の匂ひの甘さ、快よき、眼の光りは生きくとして閃くやうに輝き、其の髪の一筋々々にも男の心を引き付けざれば止まぬ強い女の生命が流れ動いて居る。

落日の美観。一しほなりき。

心侘びし。如何とも救ふに由なし。衰えを感じず。

七月十一日

盛夏の候となりたり。連日の炎天、暑気甚だし。夜、月清し。

四五日以来仕事の為に奔走す。道を歩く時烈日に土のこげる臭ひ辛く鼻を突く。眼眩めく。斯る時白日の暗黒を覚ゆ。苦熱の為に生物のあえぎ悩む姿、自らの苦しむ姿、一種の快感を覚ゆ。

七月十五日

朝、少しく気分重かりしも、忍びて家を出づ。雑司ヶ谷に桂月氏をたづねしも不在、更に薬王寺前町に抱月氏を訪ひしも不在なりき。帰途、堪へ難きまで倦怠を覚ゆ。漸く帰宿、其の俛横はる。

食欲進まず、午后より烈しき熱発。臥床。夜、医師を迎ふ。多分暑気あたりなるべしと云ふ。此の四五日来の無理の結果なるべし。

苦痛甚だし。苦しみ、悩む吾れ自身の姿を見るところに、かすかなる快き味ひあり。光彩もなく、希望もなく、ろつを嘔むやうな生活なれば、病気でもしていろいろのことを考へれば、少しは刺激になつて好し。

七月十六日

少しく快し。終日臥床。幾度もく同じ新聞や雑誌や、枕元にある一枚の意味もなき端書を取り上げて見る。一日床に臥せば斯くまで無聊を感じるものにや。若し、不治症にでもなつて一年二年三年 或は五年 七年、あゝ、心より戦慄を覚ゆ。寧ろ潔く死なんのみ。

加藤君を煩はして弟の為に帯、襦袢を送る。

七月十七日

大いに快方。寝て居ることに飽きくしたり。いろくなものが食ひたし、蒲焼

洋食、柳川、すし、天ぷら、ハム、おでん、納豆、いやしん坊也

何故に吾が生命は尊きや

何故に吾は生きんことを願ふや

宿題なり。

『新潮』八月号には六篇の無署名、匿名雅号の記事がある。

隠れたる尾崎紅葉の一面 × × 生

門より玄關まで(六) 夏目漱石

訪問記者の其日く

噂の種

都会写生(其二) 水端場と公園の暮色

七月の重なる創作

これらの中で武羅夫の執筆したと思われるものは「訪問記者其日く」と「噂の種」の二篇である。前者では以下の作家達を訪問している。

七月七日 春雨、未明、愛山、

九日 三叉、三重吉

十日 天外、重昂、有明

十一日 霜川、宙外、光太郎

十二日 葉舟

十三日 霜川、紅緑

翌八月の同記事との関係から武羅夫の手になるものといえる。後年、武羅夫は訪問記者というものについて次のように述べている。

訪問記者のような摺れつからしのしごとをしていると、何度人を訪ねても、個人的には少しも親しくはならないのが常である。職業のための訪問なので、向こうも心から打ち解けるといふようなことはないのが当然だし、こちらとしても或る限界を越えて、人のふところに飛び込んでゆくといふような、そういう気を許した親しみ方はしないのである。職業を弁え、自分は自分としての矜持を持ち、常に謹みぶかい節度を以て、その上で客間にでも書齋にでも飛び込んでゆく。旗じるしを押し立てて敵陣に斬り込んでゆくと同じような気持であると言つても、決して誇張ではない。

『明治大正の文学者』昭44・5・5 中村克子刊による

また、十日の志賀重昂訪問は「噂の種」の

永井荷風、水野葉舟

真山青果

志賀重昂

のうちの重昂に関する記述と呼応している。

三

八月七日

小田原より帰る。無意味に長き日を空しうしたる幽かなる悔ひを感ず。されど、さまざまな性格、さまざまな心理、其の性格と性格と相てい触して起る心理の起伏、又、それ等に対して活らく我が心理の消長、冷かなる心もて之れを眺め味ひ得しことにかすかなる満足あり。我が眼明らかに、我が耳敏き限り、如何なる場合に、何物をか握りつゝあるなり。唯一の慰めなり。

新潮社へ廻りて十時帰宿、月光町に蒼く流れて、女の肌殊に美し、其の瞳の輝ける光りを見よ、其の肌膚の柔らかく艶々しきを見よ、全機能の旺盛なる勢ひと力とをもて生活する響き耳に触るゝ心地す。悩ましく又狂ほしき哉

入浴、机前に端座して月光を満身に浴びて空を見る。心、洞の如く儚し、何事も思はず、何事も考へず、たゞ云ひ難き一種の力の胸を庄する淡き苦痛を覚ゆ。

十二時就床。

八月八日

早起、空曇りて霧の如き小雨ハラ／＼と降る、昼の暑さを想はしむ。

新潮社へ行き金受取る。三輪田元道を訪ひしも鎌倉へ避暑中、魯庵氏をたづねたり、何時も快き人、十一時まで話す。父の家へ行きしも不愉快なり、三分にして帰る、あゝ、母、弟、妹を憐む心なかりせば、何故に他人に対するが如き心もて父母弟妹に懐しむことを得ざるや。想ふに余りに愛すること深きが故に厭ふこと強きならん。愛せざる心、許す心を以て肉身に對することを得たらんには、如何に此の心の痛み薄からんものを。厭ふ可く、憎む可きは肉身なり。眼に蓋せよ、あゝ彼等の生を呪ふ我が心に我が怖れ顫ふ。

夕方、西日かすかに窓に揺れて、柿の青葉に鳴る風に秋の声を聞く。人の声、物の音、悲しく響きて我が心消えても行くが如く侘びし。

静座して空を望む、日の光り、雲の動く様、秋は既に来りたるなり、満眼の涙頬に伝ふ。何の涙ぞ、抑も何の涙ぞ。人間の悲みを痛感したる苦がき涙なり。

我が心弱し、醜し、吾れに悪魔の如き惨忍の心ありせば

八月十日

午前雨。昨夜来の大雨にて市中侵水家屋あり、大騒ぎなり。江戸川の水氾濫せるを見る。濁水の流れる勢ひ凄まじし。

夜、月清し、柿の青葉に降り注ぐ其の光り銀の如し。未明氏宅にて、庭に悲む虫の歌を聞く。たゞ一足淋しく悲しくチロ／＼と鳴く。其の声に秋の悲みを含みて、

我が胸を刺すが如く迫る。

十一時帰宿、夜更けと共に心益々水の如く澄みて空し、荒涼たる我が生活に堪へざらんとす。どうにも仕様なきなり。眼を開いて吾れ自身の此の痛苦の生存を絶えず正視するの痛ましきより寸時も遁らるゝを許されず、あゝ、死をすら許されざる者の生存の痛ましきよ。

十二時就寝。寝ながら月の清明を仰ぐ。

八月十七日

早起。浜へ行く。空全く晴れて海面深碧なり。

八月廿二日

昨夜、星明るくまた／＼夜にてありし。夕暮れより浜に出で、静かに暮れ行く海の闇を眺む。波は静かに忍び寄り忍び返して、海の面は滑らかに鈍藍の光りあり、此の柔らかに幽かに消え行く昼の光りよ、夢と言はんにあまりに色と光りあり。船を夜番する七十の老翁ありて火を焚く、血の如く赤し。

浜に心中せる女の死骸上る。色白く、眉濃く、唇の色砂の如し。金の入歯一枚少しく開きたる口に光る。東京しほりの浴衣を着し、黒纏子とお召ぢみの昼夜帯を締め、友禅縮緬の帯上げの色くすみたり。白き足よ、柔らかなる肌よ、痛ましく砂の上に横たはる。潮に濡れし束髪は乱れて、血に塗りし如く気味悪し。一枚の汚れし蕨を無雑作に打ちかぶせたり。光明に満ちたる朝の日光は輝かしく照らす、圍繞せる衆人の目は彼女の痛ましき死屍の一点に注ぎ、囁く声は口から耳へと伝はる。而も彼女の緘したる口は一語も語らず、瞑したる目は永へに開かず、冷々として横はる。死者の犯しがたき權威を感ず。

死者の心事は死者其の人にあらざれば知る能はず、冷酷なる永久の秘密なり、而も、憶惻を逞ふしてのなきに矢を放ち得る者の幸福さよ、又痛ましきよ。

戸板に乗せんとする時、双の袂よりホロ／＼と砂こぼる。星降るが如く煌く夜更けに、石を拾ひて入れし彼女が心事よ。彼女に就て知ることを欲せず、聞くことを願はず、たゞ、吾れ自身の心に永久の詩として残さんと欲す。

考へることに於てすら怠けたり、振り返りて我が心を見る時、痛ましさに堪へず。一切が否なり、耻ぢなり。沈黙と、冷徹なる心とを要す。

未法の人、遂に吾れは救はる可き人間にあらず、寧ろ悪魔となりて生きん。人間の肉を噛み、血を吸ひ、魂を食ひて、永えの悪魔たらんこそ我が願ひなり。

人間の善と美と徳を嘲れよ、人間の幸福と、喜びと、満足を呪へよ。吾れに若し全能の力ありせば、人間の求むる物を奪ひ、願ひ欲せざる物を与へて、彼等が痛苦の叫喚と、悲鳴と、嘆きの吐息を聞きて吾が心を慰め樂ましめんものを。

祈らんとする心切なり、而も祈れざる苦みあり

心たゞ苦しく重し、万貫の鉄鎖に全身を縛され居るが如き心地す、猛然として起たんか。

日の光り、風のそよぎ、草間に慌たゞしく歌ひ頻る虫の音にも秋の気満つ。殊に哀れるは蠅の羽に力なきことなり、朝早くなど、射し入る縁の日光につどひて休ふ、そゞろ哀れの深きを覚えて、むげに殺すに忍びず。弱し。

今日の夕も又静かに、稚児の眠るが如く暮れて行く。夜、八時を過ぐるまで砂に伏し、空を仰ぎ、波の音に耳を傾けて、考へること深し。星の飛ぶこと頻りなり。朝見し心中の女に依りて、愛、死、などの問題今更の如く考へ煩ひて、胸を悩まざる。

夜、遅くまで浜に時を過ぐす。

八月廿三日

波極めて穏やかなり。終日海に入りて暮す。

人は真に人を理解し得るものなりや。理解と云ふことに対する絶望。人と人との交渉に於ての希望は気分の共鳴以外にはなし。理解とは、己れの一部を、他に押しはめて、己れを知ること以外ならざる也。要するに人間は己れを離れて人を観、且つ知ることを許されず。真に正しき理解は、AがA自身を空しふしてBの全部となり得たる時の状態なり。人と人との関係に於て斯る状態なし。正しき理解は己が己に対してのみなざる。

夜、廢船に坐して明るき室に動く人々を見る。群集の爲めに動くに外ならざるを感ず。

八月廿四日

五時目醒む。青き蚊帳の中に伏して、縁の硝子障子越しに、將に日の出でんとする東の空を見る。

海に行く。雲は美しく彩られたり、日は静かに上る。裸躰となりて波に漱ぎ、顔を洗ひ潮を浴む。

気紛れなる小雨ハラ／＼と降る。

一昨日朝見し心中の女の相手の男は、死せずして警察の手に捕えられし由なり。女を海に入れて己れは一步も波に入らず遁れ去り、残せし錢入れを惜みてウロ／＼と捜し居しを捕えられたるなりと。

此の男を憎むことも出来ず、嘲ることも出来ず、又、罵ることも出来ざる苦しき吾が心淋しく悲し。重き苦しみ吾が胸を圧す。

己れを観ることなせずして、而して己れを知ることなくして、他を憎み罵り得る者の幸福さよ、又、痛ましさよ。

冷敵なる心の眼を開きて、絶えず己れを責め鞭ち、吾れと吾が感情の自由を食み滅ぼす吾が生の痛苦に堪へざらんとす。

自己反省のしめ木に自己を掛けて、飽くまで高度の圧搾を加ふ。やがて、何時の日か爆発の期来るならん。

厚く、卑しげなる唇を頻りなく動かして、喋り、笑ふ吾れ自身の姿の醜を耻づ。

嘲りの目もて吾れは吾が此の姿を正しく見、而して悔ひ、耻づるなり。汝、犬の如く他に向つて何を求め願ふなるや。餓えたる犬の姿を吾れは吾れ自身の姿に見る。語らざれ、表白せざれ、たゞ冷々として一切を見よ。

午后、風涛の音慌しく耳に響く。海の色濃く悽し。

広い砂浜に蹲つて、風に吹かれて海を見て居る女がある。おとなしい銀杏返しに結つて、鼠白飛の着物に紫縹子の帯が目につく。能く浜に見る女だ。何を思ふのか、何を考へるのか、ぢつと波を見入つて居る。色は黒いが、其のつゞましき姿が可憐に心を惹く。殊に後ろから見た眉の線に柔らかに弱々しいのが、此の女の憂ひと悩みを語つて強く胸に迫る。しばみかけた花のやうに、可憐に、淋しく、悲しい女だ。

何う云ふ女か、知りたくない。たゞ此の悲しい姿を忘れたくない。

夕方、蝉の声が錆びて、心が物悲しい。悲みや涙を味ふにふさはしくない自分ではあるけれども、それでも淋しく悲しい。

八月廿五日

風吹く、慌だしく、心落付かぬ日なり。毎日白紙の如く空しき日を送りて過ぐ。

静かに静かに落付きて考ふることの必要を感ず。

兎の如く無思慮に笑ひ、飛び跳ねる吾が軽てぶなる振舞ひ、悔ひあり。今少しく自重を要す。

女は真に人を観得るものなりや。彼等の観るところは断片なり、破片なり。浅慮と、無智、真に憫むべきものあるを見る。

夕暮れ浜に踞して波を見る。総べての人の厭はしさに堪へず。

八月廿六日

朝、海に行く。風ありて波高し。

八月廿七日 日の出を眺む。

夜、浜に伏して海の音を聞く。我が姿淋し。

濡れし手拭に機織の休みてほろ／＼と鳴く。美し。

八月廿八日

朝、海に對す。海は我が懐かしきもの／＼つなり。間断なき同じ波の姿を見詰むる時、遣る瀨なく心の狂しさを感ず。

偶と見れば、鏡に止まりし青き機織の優しき姿あり、心惹かれぬ。

夜、松原の細路を歩みて、古寺の苔蒸したる石塙イサにこぼろぎの音を聞く。キリ／＼と淋しくたゞ一足の鳴く。線香の匂ひ鼻にたゞよひ来る。

此の日函根湯本まで行きたり、溪流と断崖美し。

八月廿九日

三時半目覚む。四時海へ行く。波暗し。広き浜に坐して物思ふこと深し。大いなる海、恐ろしき波、懐し。

人と、而して声の厭はしさ、呪はしさを覚ゆ、胸迫りて苦し。

たゞ一のものを求む。

強き酒と、ふくやかなる女の肉と。吾れ又放縱の生活に馳らんか。

一切を忍ぶ 其所に自らの權威あり。

人間は自己の力を事実の上に見ることを願ふ。

生きるに二途あり。己れの力を恃まんか、力を殺して、無抵抗の下に生存せんか。

笑へざる心 苦しき心なり。

あゝ、呪はしの目よ、耳よ、吾れ吾れが感覚を憎み呪ふ。

地上に這える虫よ 吾れ自身もそれなり。

生存は讓歩なり。死滅も亦讓歩なり。在なふ可きか、將た死す可きか。

無智か、然らざれば蛮勇か。容易に他を嘲笑して自らを価値づけんとする痛ましき人よ 吾れも亦其の一人なり。

八月卅日

新橋へ着きしは六時、細雨。燈火の光り淋しく美し。

紅緑氏宅へ泊す。

八月卅一日

新潮社へ行く。十一時帰宿。

夜、加藤君と共に神楽坂散歩。新秋の冷気肌に冷たく、人の影何となく淋しく、氣勢ひ慌たゞし。白地を着たる姿心細げに見ゆ。今年も何時かこんな季節になりたるなり。すしの立食ひ。

『新潮』九月号には五篇の無署名の記事がある。

文壇風聞録 泥人形後日譚

噂の種 女子大学における文士の評判記

文芸講話 自然の描き方

訪問記者の其日／＼ * 日記の八月八日の記述と合致点がある。

八月の重なる創作

これらの中で武羅夫の執筆したと思われるものは「噂の種」と「訪問記者其日／＼」の二篇である。前者では女子大学生の讀書傾向について述べ、荷風、薰、雨雀、昆虫をとりあげている。後者は以下の通り。

八月八日 元道、魯庵、國男

九日 横山源之助(不在)

十日 未明

十一日 御風、王堂、尚江、紅緑

十二日 草平

十三日 柳敬助

四

九月一日

実家、及び伯母の家を訪ふ。何時もの如く母より父に対する愚痴を聞かざる。我が肉身を哀み痛まねばならぬ我が心の悲しさよ。伯母の家にて中食、一時帰宿。

夜、神楽坂散歩、月明るく、燈火の光り赤し。

久し振りにて一品料理にてビールを傾く。微弱哀れむ可き欲望の満足、耻し。

淋し。水守君へ手紙を書く。

虫声悲しく、月の光り蒼し。枯野の如く荒涼たる心なり。されどく慰むべきすべは非ざるなり。

默せんのみ

九月二日

夕方、何とも云ひ難き莫愁を感じ。遣る瀬なき心の侘びしさなり。日影黄色くうすれて悲しき空の色を、昼寝の夢に醒めて偶と見たる時、我が心底知れぬ寂寥に囚へられたり。

空しき心と、空しき其の日く、我は此の我が生存の寂莫に何を以て堪へんとするや。

伏して月を仰ぐ。堪へざる心の悲愁は時に吐息となりて迸り出づ。自ら冷笑を禁じ得ず。

夜の風肌に冷たし。

夜、神楽坂散歩、何物を見るも心惹かるゝものなし、すべて侘びしく悲し。ミルクホールにてミルクを飲み、新聞に目を通す。珍らしきことも非ず。

帽子屋、呉服屋など冬物を以て店頭を飾り初めたり。

あゝ、秋は来りたるなり。

九月六日

昨夜佐藤氏宅へ泊。眼覚めれば小雨。秋の雨は淋しく悲し。午后に至りて止む。

夕方より東海林君、おばさんと共に浅草へ行く。駒形のごぜう鍋にて夕食、一酌を傾く。

東橋亭に美光の二十四孝を聴く。久し振りなり。表情に苦み味も出で、語り方も落付きて巧みなり。声相変らず美し。

公園を廻りて帰途につく。池の水にうつりたる赤き、青き燈火の光り美し。月光さやかに流れて、万物皆蒼し。黒き吾が影を踏みて茗荷谷まで帰る。

虫声と、月光と、涼風と、寝るには余りに惜しき夜なり。四時近きまで東海林君と語る。

九月七日

早朝帰宅。新潮社へ行く。

午后一時間ばかり午睡。青果氏の使ひとして野沢君来る。暑さを犯して行く。夜、青山原宿に内田清之助氏を問ふ。月明るく蒼し。

帰途神楽坂にて加藤君と会ふ。同道。十一時までいろくな話。

心侘びし。淋しく床に就く。

九月八日

朝の日影、赤く障子にうつりて顫える様を床に伏して眺む。侘びしき心なり。午前新潮社へ行きしも不在。

暑気強し、残んの暑さなり。暑きうちにも其の底に弱々しき影のたゞよへるを感じて淋し。

夕方、物の響こまかく顫えて、我が胸遣る瀬なき侘びしさに曇る。あゝ、苦しく、痛ましき心よ。

夕方より紅緑氏宅へ行く。東海林君と共に江戸川の馬肉屋へ一酌を傾く。二月頃生活の荒みたる折、度々盃を挙げしところなり。知れる女は一人しか居らず、他は皆何所へか行けるなり。流転極りなきは彼等の生活なり。

紅緑氏宅泊

九月九日

五時起床。早刻帰宿せしも宿の門未だ閉り居れり。神楽坂下まで行く。朝の町静かにして快し。

午睡。入浴。

夕方より紅緑氏宅へ出かく。

此の夜、月清し。東海林君と共に、前のソバ屋にて一酌を傾く。来客ありて仕事を終りしは二時。将棋数番にして三時過ぎ就寝。

九月十日

厭はしい心持ちだ。

十一時帰宿。生あたゝかな風が吹いて、空は曇つて時々ハラ／＼と雨を降らす。東海林君、佐藤惣之助君、中島弥一郎君、木村水居君来訪。雑談。

夕方、雑司ヶ谷に未明氏、御風氏を訪ふ。

帰途、月ありて、虫声明らかかなり。此の二三日暑気にはかに甚だしく、日中は九十度以上。

九月廿三日

此の日記をつけることも十日余り怠けて居た。此の間別に変つたこともない。最つすつかり秋になつた。風が肌に寒い。今夕方、侘びしさが刺すやうに胸に浸みる。けれども、どうすることも出来ないのだ。

オ、神よ、願くば此の動き揺いで止まるところを知らない私の心をして、落付かして下さい。

何もしない。此の思ひが私の心を烈しく責める。けれども私には何も出来ないのだ。あゝ、私の頭は湯き饑えて居る。

夜、ピヤホールにて一酌。窗外虫の音澄めり。五六日前よりたゞ一疋のみ鳴く。

九月廿八日

夜東京亭にて一酌。酒の味舌に佳なり。

九月廿九日

昨日来の下痢の爲め、気分悪し。殊に二三日前の相撲の爲め、身軀の方々に痛みを覚えて動けず。自ら脾弱なるに呆るゝ外なし。

秋なり、夜、窓外に虫の音絶えぐに響く。哀れ深し。雲、蒼き空に浮動して、七日ばかりの月かすかに照る。

水の如き心の空虚。

「竹取物語」「伊勢物語」を読む。

『新潮』一〇月号には六篇の無署名、匿名雅号の記事がある。

『新潮』朝御幸ヶ浜に情死せる女を見るの記

黒羅漢

門より玄関まで

『微光』のヒロインと運命を同じうせる女

丘の人

と 蛮風一陣カツエエブランタンを襲つて荷風歡樂、押川冒険に殴るらるゝこと

訪問記者の其日く * 日記の八月八日の記述と合致点がある。

九月の重なる創作

これらの中で武羅夫の執筆したと思われるものは、八月二二日の記事と呼応する黒羅漢の「新秋の朝御幸ヶ浜に情死せる女を見るの記」、訪問記事の「門より玄関まで」と「訪問記者其日く」の三篇である。「門より玄関まで」は逍遙、抱月、鏡花野地宅の様子を書いたものだが武羅夫の筆になるものかどうか確証はない。「訪問記者の其日く」の内容は以下の通り。

八月一〇日 未明、御風

九月一日 白鳥、秋声、曙夢

一二日 源之助、素川

一三日 霜川

一四日 筑水

一五日 尚江、曙夢

一七日 文泉、霜川

一八日 紅緑

「新秋の朝御幸ヶ浜に情死せる女を見るの記」は海に入つて心中した女の死骸を見ての感想である。

女は冷やかに横たはつて居る。其の時私は死者の權威を感じた。偶と自殺を思ふことがあつても、死後の醜骸を人々の眼に晒すことを考へると、堪へ難い恥ぢを覚えるのを常とした。けれども今、人々のとげぐしい眼も、囁きも恐るゝところなく、環視の中に一人黙して冷々と横たはつて居る死骸を見ると、却つて彼等の多くの魂が此の一少女の爲めに嗤はれて居るやうな恥しさを覚えた。恐れざれば其所に權威が生ず、死して醜骸を見られることは必ずしも恥ぢではない。

女の死体が医者によつて検視され、衆人の環視に曝されるのを見ながら、そこに死の尊嚴を感じ取つていふと言えよう。それは心中というものがもつロマンティックなイメージを拒否する姿勢といえよう。また不快な心持ち さえもが自ら抱える 心の空しさ を満たしてくれるほどの空虚に侵されている自分の心境を述べ、女を死なせて逃げた男に 其の男はやがて私ぢやないか と自らを重ねて自虐に陥つていふ自分を憫笑している。そうした複雑さの中に当時の武羅夫の心境はあつたようである。

五

十月十七日

K子が結婚の爲めマニラへ行きしとのこと、伯母より聞く。高く笑ひ、能く身を動かし、能く喋りたりと。伯母も横浜に船に乗るまで送りし由。柳川氏の夫人も、中々の娘さんだ、あれならマニラまでも行ける」と、伯母に語りし由。K子は沈鬱なところのある女にてありしやう覚ゆ。

全一年会はない間に、どんなことをして、どんなにvariしことやら、何んとなく儂なく侘びしき心地して、胸重し。

あゝ、斯くして我が若き日の夢の跡も徐々に消え行く。

十月十八日

昨夜十二時、風葉先生より電話あり、臥床中なりしも、東洋軒まで出掛く。青果、靈華、山里の諸氏も同席。先生は今朝出京の由。

見附より車にて先生、靈華の二氏と共に千住まで行く。星瞬きて、風冷たし。池の端にて青葉の影に点りたる瓦斯の光り美し。

一年前の女。何んの興味もなし。たゞ冷たきビールをがぶぐくと傾く。

三時寝に就きて、七時起床。日影眩しく、遠くにのびやかなる汽笛の音聞えて心地好し。

川蒸気にて吾妻橋まで下る。水濁り、蘆枯ればみ、秋更けたるも淋し。

駒形とせう鍋にて朝飯。霜川、竜峽二氏訪問、十二時帰宿。

午睡、夕方入浴。

東海林君、惣之助君、土屋君来る。

紅緑氏宅へ行き、トロロ汁にて夕食。秋田雨雀君来られ、三人にて水道町縁日散歩、心持ち沈鬱になりて仕方なし。

十時帰宿。我が室の明るき電気の光りに触れたる時、非常に嬉しさを感じたり。

何事も考へず、何事もなさずして日を送り居る如き心地して、落付かず。どうかして落付いた、愉快な心持ちになりたし。

十月廿五日

午后文部省の絵画展覧会を見る。日本画には何んの新味も工夫も見えず。見るのに非常に疲労を感じず。油絵の方を見ては稍々興味あり。日本画は散漫にして統一なく、何れを見るも同型同筆にしてオリチナルの点なければ、退屈と疲れとを覚ゆるなり。

十月廿六日

雲りたる日、午后水守君宿を訪ひ、新潮社へ廻りて茗荷谷へ帰る。

夕方、堪へ難き心の廓寥を感じず。一人山に隠れて泣きたいやうな心地す。何を見ても、何を聞いても淋しく悲しきなり。あゝ、我が心を楽しみ慰ましむる何物もなきなり。

多くの他人の間に生きて行く、讓歩の苦痛。

孤独を熱望して、而も孤独を厭ひ、孤独を許されざる悲み。

何を以て我は此の淋しく悲しき我が生存に堪へんとするか。而も自ら殺すことを

得ざるを如何せん。

寂寥を感じるは他に向つて何物をか求むる心切なるが為めならずや。

あゝ、人間の饒舌と、姿態の厭はしき哉

怠けたる生活 我れ何事を成しつゝありや、又、成さんとせるや。戦慄と、畏怖の我が心を襲ふ

秋の夜更けの波の音、茫々果てしなき夕の海、其の寂寥と空漠の懐しき哉

苦しい、而も何を斯くまで苦しむのか分らない。

肉親ニクニに対する不親切、あゝ、父の顔、母の姿、吾は斯くまで母と父とを想ふなり。

而も其の半面に相厭ひ、相憎むの心烈し。

笑つて総べてを容るゝ心、其の心境に至らんに吾が心余りに距離あり。

『新潮』一一月号には四篇の無署名、匿名雅号の記事がある。

『紫風呂敷の荷風』

?.....であつたら

小剣氏と星湖氏

髯と煙草 文士、癖のいろく

これらの内、「?.....であつたら」は訪問記者の 鷗外氏が今三十年若かつた

ら 以下の質問に、孤蝶、霜川、秋江、御風、紅緑、有明らが答えるという訪問

記事の変形で武羅夫の執筆かとも思われるが確証はない。

六

十一月三日

光彩もなく此の日を送る。日本晴の好天気なり。午前木下尚江氏の「日蓮論」読了。考へること多し。

午後、顔を剃り、入浴、帰宿すれば水守君来り居れり。柿カキなどむきて、取り止まりたる談もなく、半日を送る。口にするところは、如何とも遣る瀬なき現在の寂

しき心なり。

何んとかして気持ちを変へんと、七時外出。風類に冷たく、月光白し。既に冬なり。道を歩く人々も寒さに肩をすぼめて、肌寒気なり。

本屋をひやかし、おでんにて一酌。興なし。別れて帰り行く水守君の後姿淋し。我が心も堪へ難く淋し。

十月三十一日の夜、明進軒にて一酌、それより千住へ出掛く。水守君と同道なり。明進軒の女。

十二時過ぎまで乱酔。

翌日囊中五円。少しく足らず。水守君金を取りに帰る。十五金を懐ろにして来る。昨日、春葉氏の名にて田舎新聞へ売りし小説の稿料。水守君の父君危篤の爲め、帰国に入用の金なり。

居残りて待つ間を、一酌傾けつゝあり。十時半水守君帰来。酒をあほりて泥酔、前後不覚。乱れたる女の姿、チラ／＼と目にあり。

夕刻、ハラ／＼と雨の音を聞く。

八時、同所を出づ。月光明るく、星影冷たし。遣る瀬なき哀愁。胸に漲る。何物をも抛つて、再び引き返さんかと思ふ。むしろ、自殺でもしたし。淋し。

昨夜より一粒の米も口にせず。加ふるに乱酔、疲労甚だし。宿に帰りてウドンをやはらかに煮、玉子をかけて胃を満たす。

水守君泊す。
不眠 苦痛

十一月廿一日

午前小雨。籠居して「寂しき人々」を読了。左迄で胸に触れて来ず。

午後、入浴。大塚まで行きて可。
夜、別に成すこともなく、退屈なり。本を読まんと思ひしも、疲れて居て其の気にもならず。たゞ淋し。

『新潮』一二月号には四篇の無署名、匿名雅号の記事がある。
四十四年の文壇 弾正台

大新聞小新聞の区別のあつた頃

文壇風聞録

文芸講話 倫理的批評

これらの内のいくつかは武羅夫の執筆であろうが確定するのは困難である。

七

四十五年三月二十八日

(日記の末尾はこの一行で終わっている)

八

以下の無題の詩は日記に挟まれていた一枚の詩稿である。

時は過ぎゆく

喜びも楽しみも

はた苦しみも悲しみも

水の上に浮かぶ、

はかなき泡沫か、

一時の雲間にかゝる

七彩の虹か

消えて残らぬ

うたかたの夢か

(平成十九年九月十八日受理)